

D.C. グリーンの『Tenrikyō』（5）

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

ここまで数回にわたり、D.C. グリーン氏が日本アジア協会の例会で行った「天理教一天の理の教え」の口頭発表に関して『The Japan Weekly Mail』に掲載された記事の内容を見てきた。今号ではグリーン氏の論文の日本語訳を行った中西喜代造氏の翻訳にまつわるエピソードやこの論文への評価について見てみることにする。

中西氏がこのグリーン論文を翻訳したのは、同論文掲載の『日本アジア協会紀要』が発行された1895年（明治28年）12月から約35年後であった。中西氏によれば、1929年（昭和4年）10月ごろ同氏はこの論文の存在を知り、中山正善2代真柱の了承のもと翻訳に取り組むことになった。その日本語訳は「外国文献に現れた天理教：天理教 神学博士デイ・セイ・グリーン 訳者中西喜代造」という表題の下、『天理時報』の1931年（昭和6年）1月8日号から同年9月10日号まで合計31回にわたり掲載されている。

また中西氏はこの論文の全訳の掲載を終えた後、9月17日号と24日号の2回にわたり『『グリーン氏天理教』に就いて』との表題で、この論文の特徴や意義、また同氏の所感などを記している。この論文が発表されたのが1895年であることを考えると、その数年前からグリーン氏が研究を始めていたと中西氏は推察し、次のように述べる。

明治二十六、七と云えば、天理教に対する社会の攻撃や政府の弾圧がまだまだ厳しかった時代で、グリーン氏天理教をお読み下さっている松村先生も、当時を追想されて『当時の学者などは天理教にはまるで冷淡で全然歯牙にもかけなかったからなあ』と述懐されてみられる位です。ですから、斯かる時代に、斯かる有力な雑誌に、而かも斯かる有力な歴史的人物が堂々数十頁の論文を発表したと云ふことは、其の所論の妥当たと否とに拘らず注目に値することと思ひます。まして況んや、その全編を通じて、常に理解と同情ある見解に終始し、その間、翻訳の最も困難とせられるお筆先の一部、並びに神楽歌の全訳を掲載するに至つては全く賛嘆敬服の外ないのであります。⁽¹⁾

そして中西氏は次のように続けている。

私は翻訳しながら、この論文訳の発表は少なくとも三十年以上も遅れたと云ふことを痛感したわけであります。何故なれば、若しもこの論文が日本語で書かれてゐたか、或は直ちに翻訳されてその誤れる一部所見を訂正して、これを天下に発表すれば、欧化主義に狂奔して居た当時の所謂学者にも多少は天理教の何たるかを理解せしめ得たであらうし、従つて又徒らに偏見弾圧に終始した我が国の当局をして、明治二十九年に於けるあの念の入つた天理教撲滅の秘密訓令を出す等の愚挙を敢へてせしめなかつたかも知れぬし、更に又、本教の独立運動にも多少の影響を與へ、従つて今日海外伝道を控へて教義の再吟味を止むなくせしめてゐる天理教々義表現問題に関し、同時に於いて充分の考慮を払い得たであらうにと、彼れ是れと思ひ浮べて見て、実に残念至極に思ふ者であります。⁽²⁾

このように述べたうえで、中西氏はグリーン論文の「構成

要素の特殊性」を大きく5つにわけて説明している。まず1つ目は、この論文が「日本語の理解に制限を多分に受ける外人」によって書かれているということ、2つ目は、著者であるグリーン氏、論文執筆の援助者であった当時の同志社大学小崎弘道総長、松山尊義教授、そしてゴールドン博士らが皆キリスト教信者であったこと、そして3つ目は、研究の資料として、天理教の「みかぐらうた」、「おふでさき」の一部、説教集などを使用する一方で、仏教者などが書いた反天理教の出版物を参考にしてしている点である。また4つ目は、グリーン氏が教祖の墓地や東京の教会に訪れるなど、執筆にあたり実地に調査をしている点であり、5つ目としては、この論文が執筆されたのは『天理教教典』（明治教典）が刊行される前であったことである。こうした中西氏の分析は、このグリーン論文の特徴を明らかにするものであり、またそこから、グリーン氏の執筆時の背景、執筆への姿勢、そして当時の天理教の状況などをうかがうことができる。

さらに、このようにグリーン論文の意義を十分に評価したうえで、中西氏は、中山家と足達家が貧乏であったこと、教祖の神憑り前後の模様、神名の呼称、天啓のある以前から教祖は神であると隣人から見られていたことなどは、グリーン氏の理解が及んでいない部分であった、と指摘している。また一方で、天理教を不当に扱っている仏教徒に対しては真向からその誤謬を指摘していることなどを記している。

さらに、中西氏は、翌1932年（昭和7年）の4月に小崎同志社大学総長、5月に松山教授をそれぞれ訪問し、その様子を『天理図書館月報』の第11号から13号に記している。小崎総長との話のなかで、グリーン氏やゴールドン夫妻などが天理教について関心を持ち小崎総長に天理教について質問していたこと、小崎氏自身も天理教について関心を持ったため自ら河原町の教会を訪れたこと、自分が入手した天理教に関する参考文献をグリーン氏に提供していたことなどが明らかになっている。⁽⁴⁾ また松山教授からの話として、松山氏は当時同志社で日本宗教史を担当していたことから天理教にも関心があったこと、天理教は淫祠邪教と言われていたが研究者としては「常に公平な見解に終始する必要」を感じていたこと、グリーン氏の要望に応じて天理教研究に協力したこと、天理教の元始まりの話の写本を手に入れようとしたが非常に難しかったため最終的に水口の警察署長を通じて教会から写本を手に入れたこと、それをグリーン氏へ貸したことなどが記されている。

〔註〕

（1）『天理時報』昭和6年9月17日号、4頁。

（2）同上。

（3）同上。

（4）「グリーン氏の故舊を訪ねて（一）」『天理図書館月報』第11号、1932年5月、2頁。

（5）「グリーン氏の故舊を訪ねて（二）」『天理図書館月報』第12号、1932年6月、1頁。